

角膜カンファランスの名物に学会全体の懇親会とアスレチック大会があります。今回は学会懇親会を復活することができ、横浜湾クルーズで楽しく過ごすことができました。日本のコロナ禍が横浜のクルーズ船から始まったこともあり、ブラックジョーク？と揶揄されもしましたが、大過なく終わってほっとしました。このクルーズにはアイセンターのスタッフ、医局員やORT、同門の先生も多数参加し、久しぶりの杏林宴会のようにもなりました。

角膜学会は私のメイン学会であり、この2年間理事長を務めました。この任期内に角膜カンファランスを主催できたことは感慨深いものがあります。学会には杏林で角膜外来を始めた斉藤先生や井之川先生も駆けつけて下さり、喜んでいただきました。また、平形教授や井上教授をはじめ、アイセンターの皆さんにサポートしていただきました。同門の先生がたからも目に見える形、見えない形で多くのサポートを賜りましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。

なお、4月からは東京歯科大から福井正樹先生が角膜のスタッフとして着任します。臨床経験が豊富で手術が大好きな先生です。アイセンターの角膜の臨床も研究もリスタートしたいと思っていますので、どうかよろしく願いいたします。

## イベント情報

新型コロナウイルス感染拡大状況によっては、延期や中止などの変更が生じる可能性がありますので、ご参加の際は最新の情報をご確認いただきたく存じます。

**<14th Eye Center Summit>**  
—2023年5月20日(土)17:00～19:00—  
中止になりました

**<第66回東京多摩地区眼科集談会> (現地開催のみ)**  
2023年10月21日(土)14:30～17:00 場所：杏林大学 大学院講堂  
会費：1,000円(日本眼科学会認定専門医2単位)  
教育講演：「未定」仁科 幸子 先生(国立成育医療研究センター 眼科 診療部長)

**<第25回西東京眼科フォーラム> (現地開催のみ)**  
2023年11月8日(水)19:00～21:00 場所：吉祥寺エクセルホテル東急(旧 吉祥寺第一ホテル) 8階  
会費：1,000円(日本眼科学会認定専門医2単位)  
特別講演：「未定」気賀沢 一輝 先生(杏林大学医学部眼科学教室 非常勤講師)

## 編集部からのコメント

桜の開花と共にコロナが落ち着いてきました。角膜カンファランス2023での懇親会はダイヤモンド・プリンセス号が停泊していた横浜でのディナークルーズでしたが、ウイズコロナからアフターコロナを感じました。本年度から福井正樹講師が加わり新入医局員も迎えてアイセンターは新体制になります。今後ともアイセンターのサポートを宜しく願います。(M.I.)

# Kyorin Eye Center Newsletter

vol. 67  
Spring  
2023

〒181-8611 東京都三鷹市新川6-20-2 杏林アイセンター Tel: 0422-47-5511 (ext. 2606) Fax: 0422-46-9309

◆講師就任の挨拶(福井 正樹)……………<1-2> ◆イベント情報……………<4>  
◆角膜カンファランス2023 フォトアルバム……………<2> ◆編集部からのコメント……………<4>  
◆角膜カンファランス2023を開催しました(山田 昌和)……………<3-4>  
＜執筆者:括弧に明記 production:中山真紀子、齋藤翔子、仲寫みずき＞

## 講師就任の挨拶(福井 正樹)



本年4月1日より杏林大学眼科講師を拝命致しました福井正樹と申します。角膜班に加わせて頂き、多くの角膜疾患の患者さんと日々奮闘しております。

2005年に慶應義塾大学医学部を卒業し、国立病院機構東京医療センターで初期研修を行い、2007年に慶應義塾大学医学部眼科学教室に入局しながら眼科後期研修を東京医療センターで行いました。初期研修中の選択科としての眼科、後期研修の時代から山田昌和教授にはご指導頂き、角膜・前眼部疾患、斜視弱視疾患をご教授頂いておりました。角膜移植を初めて経験したり、ドライアイの評価・治療を学び、学会発表の指導を頂いたのもその頃で

した。また、そのほか、斜視・弱視の考え方も学び、眼科医としての基礎を作っていました。

3年間の後期研修後、2010年より足利赤十字病院で医長を務め、2011年より慶應義塾大学医学部眼科学教室で角膜疾患、角膜移植を学びました。当時は1990年代に転換期を迎えた角膜移植術の術式が日本でも普及した時期でした。角膜移植というと、それまで全層角膜移植、もしくは角膜穿孔に対する表層角膜移植のみが行われていたのですが、上皮・実質・内皮の病変部位に合わせてそれぞれ輪部移植、層状移植、内皮移植を行うパーツ移植が開発・普及されたのです。それらを学べたのは今の自分に大いに寄与するところでした。

また、2013年からは屈折矯正治療を学びに南青山アイクリニックに出向しました。当時は屈折矯正手術というとLASIK(Laser in Situ Keratomileusis)ほぼ一択の時代でしたが、LASIK術合併の集団感染や消費者庁の勧告でLASIKは需要が減り、その後SMILE(Small incision lenticule extraction)やICL(Implantable Collamer Lens)が替わって需要が増えてき、その変遷を経験することができました。

もともと眼科医を目指したきっかけが学生時代に見学した角膜移植後の患者さんで、術後に乱視調整を行う診療を見た際に、術後の乱視の少ない角膜移植はできないのだろうかと考えたことがきっかけだったため、南青山アイクリニックにおける角膜移植後の乱視矯正や円錐角膜治療といった屈折へのアプローチは今の角膜診療に役立つところとなっております。

その後、2013年に東京医療センターに角膜班としての診療、網膜硝子体疾患・緑内障疾患の診療の勉強をしに異動致しました。東京医療センターで網膜電図など遺伝性疾患を学びつつ、網膜硝子体手術を教わり、また、緑内障手術を学びました。また、2015年から4年間、連携大学院のシステムにそって、東京医療センターで勤務しながら慶應義塾大学大学院医学研究科博士課程に進学し、ドライアイ、特に慢性移植片対宿主病のマウスモデルを用いた病態の解明や治療法の開発研究を学びました。

角膜診療をより高めるために2019年より東京歯科大学市川総合病院に異動致しました。東京歯科大学市川総合病院は角膜移植のメッカと言われる角膜移植件数が日本で一番の病院ですが、移植診療ももちろん、その診療を総括するために臨床研究が盛んに行われている病院で、臨床・研究・教育を学ぶことが出来ました。また、一方で網膜硝子体疾患の診断・治療を行ったり、引き続き緑内障治療を学んだり眼科一般に対応してまいりました。

杏林大学眼科では関東東部を中心に日本全国から患者さんが受診されます。また、その中には急性期疾患、角膜であれば感染性や炎症性角膜炎、角膜穿孔、外傷などから、慢性疾患、角膜ジストロフィーやドライアイなどに至るまで様々な疾患が含まれます。その患者さんの病態、背景を考慮し、最適と思われる治療を提供していけるようにこれまでの経験を活かしつつ日々精進して参りますので、よろしくご指導お願い申し上げます。

## 角膜カンファランス2023を開催しました(山田 昌和)

角膜カンファランス2023(第47回日本角膜学会・第39回日本角膜移植学会)を2023年2月9日(木)～11日(土)にパシフィコ横浜で開催しました。

眼科領域で最初にコロナ禍の影響を受けた学会は角膜カンファランスでした。3年前の総会が開催前日に急遽中止となり、後日オンデマンド開催となりました。2年前の松山での総会もオンデマンド開催、前回の金沢はハイブリッド開催でした。ただし、まん延防止措置期間中でもあり、現地参加者は少なく会場は閑散としていました。

今回の学会も準備期間中はコロナ禍がどうなるのだろうか、現地開催が可能なのだろうか等々不安や心配でいっぱいでした。しかし学会の本来の姿、face to faceのディスカッションを基本として、顔をみて話す喜びを取り戻したいという願いを込め、今学会のスローガンをBack to the Basics to Meet New Challengesとし、現地開催を基本に準備を進めてきました。プログラムとしては、シンポジウム2つと教育セミナー3つ、学会企画モーニングシンポジウムを1つ行いました。これらのプログラムでは日本の角膜研究や臨床をリードする先生がたに演者を務めて頂き、基礎研究から臨床に役立つ知識の整理まで幅広い領域をカバーすることができました。また、一般演題には185題と数多くの応募があり、口演105題、ポスター80題としました。

年末年始にかけてオミクロン株の流行があり、コロナの状況の予測が難しかったのですが、1月から急速に感染者が減っていったのは幸運であったと思います。また、雪の予報もありましたが横浜は雨ですみ、学会運営に大きな影響はでませんでした。私、もしくは事務局長の重安先生、久須見先生の日頃の行いが良かったのでしょうか。学会には1100名を越える参加登録があり、現地参加者も700名以上と人でにぎわう学会になりました。会場での熱気あふれる質疑やポスターパネル前での討論タイムも復活し、参加者にも「学会が戻ってきた」と好評でした。

## 角膜カンファランス2023フォトアルバム



イブニングセミナーにて  
格付けチェックで素人角膜チームになってしまいました。



横浜湾クルーズにて  
悪天候でしたが、船内で盛り上がりました。



学会場での集合写真。医局員、ORTなどがサポートしてくれました。